



路地にある漆器店（海南市黒江の川端通りにて）

観光地図を追つて紀州街道を南下していく

と、漆器の町・黒江（海南市）に地理的意外性を感じた。漆は英語でjapan。学生時代に知つて既に意外性を感じていた。特別コーナーには「根来塗」の文字

重箱が展示、即売されねると、朱塗りと黒塗りのさまざまなお盆や

39 紀州漆器伝統産業会

室町～戦国時代、近づたのですか」と尋ねた。

イスカバー紀州」の場所が、今の公民館向

塗りは柿渋に松煙または炭粉を混ぜ塗布し、

川端通りの裏道には漆器店や工房が軒を連

かいの灯籠だ。

が目に留まった。近く江（滋賀県）の人たち

熊野古道 くもくとくとく記

39

が熊野詣での帰り道、わっていた。ガイドさんや漆器問屋の女主人もおられ、「なぜ当地で漆器産業が盛んになつたのですか」と尋ねた。

勢移住。紀州街道が「デ

大正時代まで続いたと云う。朱塗りは柿渋にえ。船積みの目印の

材が豊富で、気候も温暖で住みやすいことを知り、室町から戦国時代にかけて木地師が大

さで漆器産業が盛んになつたのですか」と尋ねた。ヒノキの木は炭粉を混ぜ塗布し、

櫻の製造からはじま

紀州漆器の町・黒江（海南市）

絵と文・熱田親憲

題字・熱田秦華

根来塗「わび・さび」のこころ

下地が完成。その後、中塗り、上塗りして椀づくりが完成。後に指物、箱をも手掛け、「黒江塗」の基礎ができたようだ。その後、漆の原料が枯渇し、1959（昭和34）年ごろから、樹脂による成型素地に化学塗料で塗装した新製品が開発され、手ごろなものが多種出回るようになって今に至っている。

江戸時代の発展の中心は今のが川端通りで、当時は川だった。周りに漆器問屋と宿屋があり、売り物の反物を持ち込んだ伊予の商人

は、帰りに漆器の出来上がりのを待つて船積みをして帰った。空船が、JRの便で帰らぬ伊予商人の「黒江塗」とは茶道具などに多く用いられる、「黒江塗」とは別物であるという。永年道具を使用していると朱塗りが増えて、下

塗りの黒漆が随所に表示される。この朱と黒の対照が独特の味わいを出し、茶人や好事人に親しまれ、今日ではあらかじめ「朱塗りの摺れ」がデザイン化されて、工芸品や商品として受け継がれている。ちょうどダメージ加工されたジーンズのファッショニ似ている。塗りの摺れを傷物とせざ、「美」として生き返らせる手法は「わび・さび」のこころに通じ、環境にも優しい。

海南市の地場産業に標準化したわしなど日用雑貨

黒江漆器の木椀づくり

が、ルーツなつている

が故かもしれないと思

いながら帰途について

漆桶すみれの鉢のと

り西み

秦華

路地にある漆器店（海南市黒江の川端通りにて）

木製の素地の上に鋲び漆や蝶色漆で下塗りを行い、黒漆で中塗りをした上に朱漆を塗た。

漆桶すみれの鉢のと

り西み

秦華